

令和7年度 教員地域貢献活動支援事業（学長裁量事業）

地域実践研究 成果報告書

本事業について次のとおり成果を報告します。

1 研究課題名

豊かな都市経験に向けた「まち歩きワークショップ」のフォト・プロジェクト的探究

2 研究代表者

横浜市立大学 国際教養学部 准教授 角田 隆一

3 本事業に協力・参画した機関等

合同会社 TOKYO PHOTOGRAPHIC RESEARCH

4 研究体制

横浜市立大学 国際教養学部 教授 中西正彦

5 この研究活動の概要

「訪れたい、住みたい、住み続けたいまち」を目指す金沢区にとって、2つの大学キャンパスを抱えるキャンパスタウンとしての各種リソースは、文化的魅力の観点からきわめて重要なポイントとなる。本研究課題は、社会学ゼミの教員・学生による「まち歩きワークショップ・カード」を活用したアクションリサーチ型のフォト・プロジェクトを横浜市立大学・関東学院大学の大学生を巻き込んで実践し、大学生による金沢区の新しい地域文化の再解釈・発見とその魅力的な発信の形を探究する。

6 申請研究の内容

1 テーマとなる地域課題の背景

2000年代以降とりわけ人文社会系における都市論では、地域文化の活力の減退や無個性化・均質化が叫ばれ、悲観的に語られてきた。このような現代都市における重要課題に、金沢区も例にもれない。

地域での切実な高齢化の問題を抱える中、若年層を呼び込んでいくために「訪れたい、住みたい、住み続けたいまち」を目指している。この点で2つの大学キャンパスを抱えるキャンパスタウンとしての各種リソースは文化的魅力の観点からきわめて重要なポイントとなる。これを十分に活用しない手はない。

しかし現在のところ、金沢区は他大学のまちに比べても「大学生」の活気で溢れているとはいえない。

自宅通学の学生は大学の用事が終わると駅に直行して帰ってしまう（これは申請者の昨年度研究課題における連携研究者・有馬貴之研究室での金沢区周辺の大学生人流調査でデータとしても実証された）。呼び込みたい若年層（大学生）が、魅力を感じながら学生生活を過ごし、卒業後も何かしらの形で戻ってきてくれるように、金沢区の文化的魅力が、【現代的】にアップデートされておらず、また上手に【提案】

されていない、発信側の不十分さ。また他方で、受け手（大学生）側の「楽しむ（経験）のための【リテラシー】」の不十分さ。これら両者が、悪循環を生み出している。

2 課題に取り組む意義、目的

これを受けて、昨年度は、この切実な地域課題の解決の糸口を「リベラルアーツ」の観点を重視した都市空間経験に求め、その経験を切り拓き、そのリテラシーを若年層に育成していけるような、新しい金沢八景の概念／イメージを書き換えるフォト・プロジェクトを実践した。すなわち、①学生と地域住民やアーティストと連携しながら、②社会学×リベラルアーツ的な知識×金沢区の大きな二つの地域資源（豊かで時間的厚みをもつ歴史文化的リソース・豊かで美的な景観を備える自然文化的リソース）の現代的アップデートという発信内容の方針と具体的内容の見極め、さらには③これを ZINE という紙媒体の形で写真作品制作と多くの区民や区役所の方々に向けた発表会と意見交換会を達成した。

これは、キャンパスタウンの担い手である大学生（横浜市大）が、この制作をしながら、金沢区のことをまずは興味・関心を向け始めたこと、そして地域のことを調べ、知識を得、地域の魅力を考え、それを他者に伝えていくメディアの制作と発表を実践したということになる。これらは、大学生なりの金沢区の文化の「【現代】な魅力の見極めと【提案】」＝作品化、さらにはこの作業途上での「楽しむ（経験）のための【リテラシー】」の養成という点に関し、少なくない成果をあげたと評価している。

それに加え、この成果により、解決へのさらなるステップアップに向けた糸口を二点つかむことができた。それが、A. このプロジェクト実践をゼミ生をこえて広げた横浜市立大学の学生、関東学院大学の学生にも開いていくこと、である。キャンパスタウンとして活性化していくには、横浜市立大学・関東学院大学両大学の学生のコラボレーションが必要である。次年度はまずはワークショップ参加という範囲内で両大学を積極的に結びつけていく試みを実践する。次年度から申請者は関東学院大学で非常勤講師として大人数の授業を受け持つので、そこでの勧誘や両大学の人間関係ネットワークを活用する。続いて、B. まち歩きを促進するワークショップを開催すること。これは昨年度の研究成果で大学生が金沢区をあんまり周遊しないことが実証されたことを受けている。まち歩きは都市の見方や経験の組み直しを生む（吉見俊哉 2020）。地域に関する歴史や知識が真に“自分のもの”となって愛着を醸成していくにはまち歩きが有効である。このまち歩きを促進するような仕掛けがふんだんに盛り込まれるような「まち歩きワークショップ・カード」の内容と形を探究し、実際にワークショップを複数回開催しながらその洗練化につとめる。

7 実施した内容（スケジュールと具体的な活動、実績、成果）

- 04月 ・プロジェクト始動
- 05月 ・文献資料リサーチ
- ・実地調査開始
- 06月～09月 ・横浜市立大学 中西正彦先生（都市計画）との共同まち歩きリサーチ（6/14）
- ・カード制作開始
- ・各自でリサーチ・写真撮影を実施
- ・カード制作検討会を複数回実施
- 10月 ・カード制作検討会を複数回実施
- ・学祭出展準備
- ・金沢シーサイドFM 番組出演：学祭での展覧会の広報活動（10/8）
- ・中西ゼミ・角田ゼミ合同成果発表会（10/12）
- 11月 ・浜大祭「金沢八景フォト・プロジェクト作品展覧会」（11/1, 11/2）
- ・第1回 金沢八景「画はがき」まち歩きWS（11/29）
- 12月 ・カード制作検討会を複数回実施
- 26年01月 ・金沢シーサイドFM 番組出演（最終展示会の広報活動）（1/9）
- 26年02月 ・第2回 金沢八景「画はがき」まち歩きWS（2/8）
- ・金沢八景フォト・プロジェクト 2025 最終成果発表展示会（2/28）

WS の実施概要

実施日	セッション	実施時間	参加者人数 (YCU・KGU の学部生&卒業生)
2025 年 11 月 29 日	第 1 部	11:00～13:00	10 名
	第 2 部	14:00～16:00	6 名
2026 年 2 月 8 日	第 1 部	10:30～13:00	9 名 (+ 金沢区地域振興課職員 2 名も参加)
	第 2 部	14:30～17:00	17 名

8 この研究により得られた効果と自己評価

●「金沢八景」の文化的魅力の現代的アップデートの具現化をブラッシュアップ

昨年度に引き続き、本年度はまち歩きカード 30 枚を制作し、大学生の視点による金沢区の文化的魅力を実験的なイメージとして可視化した。カード制作の過程は地域住民とのコラボレーションが誘発し、大学生と地域住民との相互の学び合いが実現した。こうした作品制作を通じて、キャンパスタウンの大学生と地域との間に新たな接点が創出され、共に地域の文化的魅力を発見し発信していく関係性が深まった。加えて、横浜市大の 1 年生や卒業生が制作に参加したことにより、在学中のゼミ生にとどまらず、キャンパスタウンの多様な主体の視点をカードに反映させることが可能となった。

●大学生・卒業生を対象にしたまち歩きワークショップによる「経験のリテラシー」の養成

本年度はまち歩きワークショップを計 2 回実施し、参加者が自ら地域を観察し、まちを新しい視点から捉え直す「経験のリテラシー」を実践的に身につける機会を創出した。とりわけ本年度は、参加者の範囲を横浜市大の 1 年生や卒業生にまで拡大した点に特徴がある。1 年生の参加は入学初期からまちへの関心を喚起する契機となり、卒業生の参加は卒業後も地域と関わり続けるためのきっかけを生み出した。すなわち、大学生生活の入口から出口までを貫く、地域への関わりと愛着を形成するための回路の構築を試みたものである。

●関東学院大学とのコラボレーションの達成

本年度の重要な成果として、関東学院大学 (KGU) とのコラボレーションが達成された。ワークショップへの KGU 学部生・卒業生の参加が実現し、キャンパスタウンに立地する二つの大学の学生が、同じまちを一緒に歩き、同じカードを手がかりに対話するという経験を共有した。さらに注目すべきは、ワークショップに参加者として加わった KGU 学生が、その後自らカード制作へと移行した点である。当該学生は地域住民へのインタビューをすでに実施しており、現在アウトプットの過程にある。このように、大学の垣根を超えて「受け手」から「送り手」への移行が実現しつつあることは、本研究が目指す悪循環の打破に向けた具体的な一歩といえる。

●大学生の視点を地域へ共有し学び合うプロセスの構築

カード制作およびワークショップの成果を地域に向けて発信するため、本年度は展覧会を二回開催した。浜大祭展覧会では約 300 名の来場があり、地域住民・地域団体・行政職員・区議会議員など多様な層が大学生の視点から捉えた地域の文化的魅力に触れる場となった。また、本年度の研究の集大成として最終成果発表展示会を開催し、地域住民、NPO 法人横濱金澤シティガイド協会、ワークショップ参加者の大学生・卒業生、横浜市立大学地域貢献センター職員、横浜市立大学同窓会浜大会事務局、金沢区自助連絡協議会、横浜市市民協働推進センター職員など、地域の多層的なアクターが一堂に会した。これらの中では、都市計画の専門家 (中西正彦教授)、写真表現の専門家 (TOKYO PHOTOGRAPHIC RESEARCH)、金沢区地域振興課の担当者から本事業に対するフィードバックを得ており、今後はこれらを踏まえてカードの内容やワークショップの設計をさらに改善していく方針である。

9 今後の課題と展開

今後も引き続いて、大学生によるリサーチ・写真カード制作・まち歩きワークショップという一連のパッケージの各プロセスをブラッシュアップしながら継続し、金沢区の新しい地域文化の再解釈・発見とその魅力的な発信の形を探究につとめていく。

今後はとりわけこの一連のパッケージの【持続可能性】を強く意識していきたい。とくに有意義な交流人口・関係人口の創出である。たとえば大学生個人は基本的に 4 年間で卒業しこの土地を離れていってしまうため、卒業生も積極的に巻き込んでいくための上手な仕組み作りは重要な課題となる。

申請者が担当するゼミは卒業生と在学生との関係が比較的緊密で卒業生本人やその人間関係による参画が期待できるため、ここを一つ大きな起点としつつも、もう少し構造＝組織的な観点では、横浜市大のOBOG組織である一般社団法人進交会との連携（申請者は同会と緊密な協力体制を組める人的環境ももつ）ならびに大学 100 周年の契機の活用を検討している。これらを通じて、卒業生の参画を積極的に推進することで、卒業生が本事業の様々なプロセスに関わり「卒業後も金沢区で生きていく」という選択肢がより具体的かつ魅力的なものとして在学生に伝える効果が期待できる（すでに金沢区への U ターン定住者による「まち歩き写真カード」制作が予定されている）。

最終的には、制作されたまち歩き写真カードやまち歩きワークショップ実践を、若年層の交流人口・関係人口を拡大（ひいては定住促進）のためのコンテンツやパッケージとして、区役所がホームページや SNS 等で効果的に活用できるように検討を重ね、本事業の成果が区の施策と有意義に連動する仕組みを構築したいと考えている。

10 本事業に関する研究発表、メディア掲載等（予定を含む）

※論文の場合は、論文名、著者名、掲載雑誌名等を記載してください。

- ・角田隆一「現代都市文化の可能性としての街歩きとフォト・プロジェクト」（『公益財団法人横浜学術教育振興財団 2024 年度助成研究等報告書』2025 年）
- ・角田隆一「まち歩き写真——まちを少しだけ面白くする写真ゲームのすすめ」（『無印都市の社会学Ⅱ——どこにでもある日常空間をもっとフィールドワークする』法律文化社、2026 年）
- ・「金沢八景に潜む「時」の「層」を写真であぶり出す」（『広報よこはま』金沢区版、2025 年 5 月）
- ・「市大と金沢区が情報交換 初の合同ミーティング」（『タウンニュース』金沢区・磯子区版、2025 年 5 月 1 日）
- ・「[金沢区役所と横浜市大がタッグ] 学生が地域の魅力を写真で発信」（『タウンニュース』金沢区・磯子区版、2025 年 8 月 15 日）
- ・金沢シーサイド FM 「かなざワッショイ！」「横浜市立大学国際教養学部 角田隆一ゼミ写真部 ゼミ教員 角田隆一先生」（2025 年 8 月 8 日・2026 年 1 月 9 日）